満鮮旅行記（昭和 12 年 5 月 26 日～6 月 8 日）

文　　五年　新井洋太郎　池本多万留　梶川勝　小林義範　西谷重夫　橘喜久雄　峯昇　安田乃　堀江恭二
　　Ｂ２　佐々木文夫　山東量平　中田健次郎　原薫
合集者　池本多万留
撮　影　野田彰（このテキストでは写真を省略しています）

出発

五月二十六日午前四時二十八分。万歳に送られて「我等の仲間」勇躍東和歌山を出発す。朝霧こむる紀の川に、伏虎の城に奥山に、しばしの別れを告げて。車窓河内平野、東雲赤く彩り我等の前途を祝福するかの如くである。北陸線にて敦賀へ一路――大阪平野・京都・逢阪山・琵琶湖・賤ヶ嶽。――敦賀着。バスに分乗して気比神宮・金崎宮に参拝す。

午後一時サイベリヤ丸に乗る。二時十五分出帆だ。門出の祝福を告げる銅羅が潮風に鳴る。「蛍の光」の楽の音で船は一尺岸壁を離れた。テープが切れた。ハンカチを振る人、手を振る人……。嬉しい中にもかすかにさみしい離別の感情。――君よ高らかに「出船の歌」を歌わん。前途の新しき土を目指して、若き我等の希望と歓喜をのせて船は日本海を行く。一同元気すこぶる旺盛。スケッチする者、海に歌うもの。船中スナップを撮すもの等等、五時半終に陸地見えず。

「ああ我旅をするかな」の気、心に湧然と湧く。夕食後軍歌練習、若人の声は荒海を圧してひびく。海の声が耳朶にひびく。波も相当高くなってきた。

海軍記念日――船の感激

日本海上の朝は明けた。

水平線が明るくなったと思うと、かなたの雲はうす樺色に……うす紅色……。やがて真紅に輝きながら太陽はにゅーと出て来た。日本海の金波銀波はきらきら躍る。今目ざめたばかりのように波に合奏しながら……。聖なる光を浴びてたつ海国男子の面には得も言われぬ感激と幸福感が錯綜して輝いている。

さいべりや丸の夜は明けた。

船客はもう大分起き出でて来て甲板より爽かな大気を呼吸している。僕等のグループは盛んに活動し談笑している。輪投げをやる者、デッキゴルフをやる者。彼等の眼中には一等も二等も三等もない。一二等乗客用の上甲板で船員とすぐ仲良しになって遊びたわむれている。

今日は海軍記念日である。記念式が上甲板で午前十時半から開催された。宮崎中佐殿の指揮で東方遥拝、天皇陛下の万歳を三唱した。万歳の声は海を渡りて我等が愛する日本の国にとどいたであろう。日章旗は海にハタハタひらめく劇的シーン。想起せよ。三十二年前の今日の今頃、この日本海のこの付近において、皇国興廃の一戦が展開せられたことを。思うだに深い感激が湧き出てくるではないか。

旅行団から遥かに母校へ暗号電報を発信す。

「天気晴朗波静か。記念日に当りて感慨無量也」

曲馬団

敦賀より町廻りの曲馬と同船する事になった。人生の苦しみにもまれた彼女等は、船が港を出る時も淋しそうに何時までも海を眺めていた。生ける屍の如く、生命なき人形の如きその姿に対して、今や前途に輝かしい希望を抱く我等の身の上と比較して同情の涙をそそるのであった。

同船の曲馬団の男と話をする機会を得た。自分達と異った世界に住む此等の男も、矢張り人であり日本人であっ

た。「一座の子弟の教育は」と問えば「彼女等も可哀想だが夫でも小学校卒業位の学力はつけてやります。」としんみり答えるのだった。成程十三四の女児がしきりに雑誌を読み耽っている。船中第二日目は海軍記念日であり、我等が記念式をこの洋上において挙行すると聞いて、「貴君方の式典に我等も参列したい。そして幸い楽器は揃っているから君ヶ代の伴奏でもさせて貰いたい。」と申立て来た。先生の許可の上で承諾する。厳粛なる式において彼等の真面目そのものの態度に感激させられた。式後も彼等は種々の曲目を合奏して一同に聞かしてくれた。船客は全部甲板に集り楽しくその音にききいった。生徒写真班は盛にカメラにおさめる。美しい海上交歓。実に気持ちの好い一日であった。

夜は曲馬団の人達とすっかり仲良しになり、曲馬団の四五才の子供のおどけた仕種に爆笑し、仲良く子供を抱いて写真におさまる。よいパパさんも現れて、和気藹々裡に過ごす。彼等も人なり、日本人なりとつくづく感じた。

船は島影一つなき大円盤上の真只中を一路西を指して——。

大陸へ

航海第二日の朝が来た。荘厳なる日の出を拝して海を眺むれば波一つない凪の朝だ。海の霊気は冷い朝風と共に頬を打つ。

「朝鮮の山が見える。」誰かの声が聞えた。見れば真黒い一線がだんだん大きくなって来る。船はスピードを落して流れるが如く静かに鏡の様な海面を滑る。

陸影の又かなたに鮮満国境の連山が白雪を戴いてそびえ、潮日に映じて白銀色に光る。パツーパツーと点滅する灯台も姿を現してきた。陸ははっきり我等の眼前に現してきた。

爽かな朝の大気を通して清津の市街が見えだした。山の斜面に赤や青がかった洋館風の建物が山の緑にまじってたまらなく美しい。

朝の入港——思えば四十時間振りの上陸である。県人会の人々の出迎えを受け大陸の地に第一歩を印した。美しい。

清津の街——清津神社のある高株山に上りて港内の大観を俯瞰しつつ森先輩のお話を聞き、公立普通学校等を見学する。再びさいべりや丸に乗船して小雨降る中を羅津に上陸する。北鮮第一の大港として大規模の築港工事が行われつつあるが、建設途上の羅津はまるで廃墟のようである。

羅浜線二十四時間

ガタガタバスに分乗して羅津港より羅津駅に向ったが、途中でバスがとまったのにはひやひやした。一日に二回位しか発車しない大陸の汽車の、発車時間はせまってくるが、いくらぶうぶうならしてもエンジンがかからない。辛じて車が動き出した。

羅津駅よりいよいよ大陸の広軌鉄道にのりこんだ。雄基より普通学校の通学児童が乗ったので、いろいろ聞いたり話し合った。内地の小学生達に較べて何と真面目な話しぶりだろう。礼儀正しく標準語ではきはきした物言いをする。純真さが現れているその態度、熱心に勉強しているのかなかくよく物を知っている。彼等の多くは十里位の遠い所より毎日汽車通学をしているのである。

「君達の通学パスはいくらか。」

「はい。三十銭です。」「三十銭！ほんとか一寸見せて下さい。」児童の通学パスを見ると一ヶ年のパスが皆三十銭である。車掌に聞けば、朝鮮の教育を奨励するためすべて普通学校（来年より小学校と改称）のパスは無料として、ただ交付する手数料として三十銭徴集するのだ。と説明してくれた。「なあーるほど、然し三十銭のパスとは驚いたね。」

阿吾地でそのかわいい子供達と別れた。汽車が出ると、パラパラ降雨の中を帽子を振りながら汽車を追っかけてくる。僕達が窓から帽子を振れば「さよならさよーなら！」と言いながら、どこまでもどこまでも追っかけてくる。振り返ればもうすっと遠くに小さく見える。残り惜しそうに帽子を振っている。僅か三四時間の同車に過ぎない彼

等同胞のかくまでいじらしい心根に、我々は感激させられた。

豆満江が見え出した。雄大なる光景、まさに大陸的である。七時十分前いよいよ豆満江を渡る。「国境守備の唄」の旋律が車輪に躍る。いよいよ満州国へはいったのだ。

やがて警乗兵が乗組んできた。電灯が半分消されて窓は全部とばりを下した。少し感じが出てきた。沿線の要処要処にはコンクリート作りの丸い建物がたっていて銃眼がいくつもあけられていて物々しい。

駅々には日本兵や満州国兵が銃剣をつけて不動の姿勢で直立していて、駅の周囲には幾重にも張られた鉄条網があって我等が心を鋭くさす。今や我等は匪賊の巣窟地帯の真只中を、横断しつつあるのだ。スリル満点。「危のない程度に匪賊が出てくると面白いぞ。」といふ無心臓男もあれば、顔色を変えて黙り込む至って優しい心臓の持主もある。

或駅では我等の列車のすぐ前の列車が匪賊に襲撃されて乗客に二名負傷したそうで、駅付近は皇軍の兵士に依って物々しい厳戒振りであった。

「ごとん」駅に止る毎に目が覚めて窓を開いて見れば、どの駅にも兵隊が警備している。装甲列車が何台も止っている。兵士が右往左往している。

明くれば二十九日。骨の節々が痛い上に馴れぬ夜汽車で充分眠れなかったために、頭が痛い。拉法に着いたのが午前四時二十九分。そこから本県出身の上田守備隊長の心盡しで装甲列車に乗せて戴き新站に向う。一番前の無蓋車に土嚢をつんだ箱にのる。朝の冷風が顔を体を痛い程なでる。手足の感覚が失いそうだ。振落されさらに「ガタンガタン」と走る壮快さ。一生忘れ得ぬ想出となるだろう。

新站で朝食をとる、站（チャン）とは駅の事で、拉浜線の新駅という意味である。駅の待合室で四辺の風景を眺めていると嚠喨たる喇叭の音が朝の野に勇しく響いてきた。その音を辿って行けば颯爽たる日本兵の雄姿に接する事が出来るだろう事を想い、我兵士よ健在なれと祈りつつ汽車に駆上った。聞けば向うの山へ匪賊討伐のために出発したそうだ。

哈爾賓に近づくにつれ平野は全く一望千里以上、多少起伏はあるものの丘の向うに消えて行く畠の畝の余りに長く美しいのに驚く。草茫々たる大平原を予想して来た我等にとつて、それは余にも発達し過ぎた北の大沃野であった。

ハルピンの街が見え出してからもなか駅まで到着しない。汽車は鳴らす鐘の音も大陸的な「カンカーン」を響かせつつハルピン駅に疲れ切った身を横たえるのだった。

ロシヤ人小学校

ハルピン

名前もいかめしいが、建物もいかめしい。コンクリートの高い建築。銀行か何かの様だ。

先ず三階でロシヤ人の校長と宮崎中佐の通訳入りの挨拶は面白かった。向うのロシヤ人満州国中佐が通訳。校長さんはなかなか愛嬌のある人だ。

「折角来て戴いたのに、生徒が帰った後で御気の毒です。何でしたら生徒の成績品を御覧下さい。」と言ってははにかみ笑う様子が、とても面白かった。

日本語教師の話は痛快だった。校長始め通訳、教師連の前で次の如く語った。

「この学校の先生たちは皆相当な学者で、貴族だった事、昔日本に旅行した事のある事等を話しては自慢にしている。しかし実力はそう高くはない。ロシヤ人の児童は大して頭が良くない。路を歩いている恰好を見ると如何にも賢そうであるが、知能は満人にも劣る位である。又彼等は社交好きであって、日本人と交際する事を大変名誉に思っている。」白系ロシヤ人の日本人観といったものをもっと知りたかったが、概要は知り得て愉快だった。

学校の設備は校舎の割合に貧弱で、粗末な机、黒板等ががらんとおかれて殺風景きわまる教室だ。灰色の学校、という感じがした。

図画の成績を見ている時、来てみた日本の憲兵中佐が、「上手や、図画は仲々上手に写してある。」と皮肉り我等に対して「ロシヤ人はあかん、恐るるに足らん。」と盛に力説していた。自在画は殆んどなく製図や臨書ばかりで、子供の創造、子供の生活の表現絵画化という事は少しも見られなかった。御好意に甘えて全部戴いて帰えった。職

員は非常なる好意を以て我等を親切に応対して下さって、まことに愉快な見学であった。

ハルピン異国情緒

ハルピンロシヤ人小学校の見学をすました我等は、直ちに松花江岸に車を走らす。有名な鉄橋、そして広くて洋々として流る松花江ボートが二つ三つ漕がれてゐる。遥かに霞む封岸には、玩具の様な美しい家がごちゃごちゃとかたまりあって、たまらなく美しい。満人街、日本人街、ロシヤ人街を通って孔子廟に参る。壮大華麗、東洋芸術の粋があつめられたかと思われる廟——毒々しいまでの赤青の配合に、満人の濃厚なる趣味がうかがわれた。

超特急でバスは並木の道を忠霊塔へと急ぐ、文字通り雲を突く高さに、高く高くそびえている。近日中に記念式があるとか、のぼりがひらめいてテントが沢山はってあった。参拝、粛然として襟を正し“高粱枯れて烏鳴く”「祖国の柱」を合唱して英霊をとむらう。“勇士よ心あれば、塚も動けよこの声に……”

付近の沖・横川両志士の墓に参拝、銃殺の地点に立ち、ビューローは熱ある話を語り始めた。志士の活躍より捕えられていよいよ銃殺の場面にまで話が進み、ビューローの案内人は、かたえの楡の木をさし、
“この木の下のこの地点で、我等の勇士は、天皇陛下万歳をとなえ、従容として北満の露と消えたのである。”

当時の悲壮なる状景が目前に浮び出る心地がして、一同深き感激に粛然として黙祷をささげたのであった。

今もなお日本男子の名も高し志士眠ります楡の木のもと（堀江）

途中工事途中で打ち捨てられた古い寺院を見る。それは彼等露人の零細な金で集めただけで作る期限なしの工事だということだ。彼等の美しい宗教心に依って蒼空高く聖塔の鐘が鳴りひびくはそも何時ぞ。我等の胸を打つ美しい話ではないか。

暮れにくい満州の夜。かつて「東洋のパリー」とまで称せられた歓楽の都ハルピンのエキゾチックな雰囲気に浸らんものと、三々五々散歩に出る。馬車、洋車がしきりに往来して、毛唐のとても大きいのが颯爽と歩んで行く。若い二人が青い瞳に夢見るが如くに腕を組んで通り越して行く。向うからは金髪を夕風になびかせながらスカートを蹴って若い乙女がきれいなウォーキングを見せて歩いて来る。満人のモダンガールが支那服断髪の上にオーバーを身につけてハイヒールの音を軽く歩んで行くと思うと、ぷーんとニンニクの臭がただよいはじめ満州だと言う事に気がつく。

日本人の往来は少い。着物を着てつつましやかに歩んでいる位だが日本人の勢力は非常な物だ。ロシヤ人の店でも日本語が通じ、サービス満点我等を優遇して来れる。日本の有難さ偉大さが偲ばれて非常に愉快だ。日本人たるの矜持を持って大手を振って闊歩する嬉しさ、内地では味われぬ感激である。

ハルピン目ぬきの繁華街キタスカヤ街——あの西洋映画に名高いキタスカヤ街の夜は刻々として賑かになって行く。エキゾチックなジャズの、華やかに輝くネオン。——旅の子の心は怪しくおののく。

ハルピンの夜の鋪道のゆきずりに、異国の情湧きて身に泌む。

新京南嶺戦跡の涙　——悲雨粛々転、感慨無量。

ハルビン発午前一〇時四五分。

満州の大動脈満鉄の重大指命を思う時——車内に一歩踏み入れた我等の心は深き緊張を覚えるのだった。

緩かな丘の起伏に、黒土の連続——それが又よく耕された沃野だ。車窓に展開される北満の大沃野、その土の一塊にも護国志士の苦心が偲ばれる。

時々楊柳の緑がすごい勢で後に走って行く。鉄橋を二つ三つ過ぎ新京へ新京へ。

午後四時二十分、国都新京に着く。バスを連ねて戦跡南嶺を弔わんとす。途中下車して皇居を拝す。満州国皇帝陛下の御仁徳が拝察されて畏い。支那商店の特徴を聞きつつバスは南嶺に向う。南嶺、あまりにも有名な満州事変激戦の跡なり。倉本少佐奮戦の地なり。降り立てば点々たる勇士の墓。空は雲低く垂れて雷を呼び、凄愴の気南嶺に漲る。天のなせる業、今当時の激戦を偲ばせんとするか、戦況を聞き勇士の墓前を弔う時、遂に風は雨を誘い、大粒の雨一二滴。怨の厠について廻れば、我が郷土の前市岡大尉戦死の所なり。心から草花を手向け黙悼しばし捧

げる時雨はばらばらと降り来る。全員襟を正して「祖国の柱」を合唱すれば大陸の驟雨いよいよ我等の頬を横なぐりに打つ。

楊柳高く聳えて、暗雲は低迷す。されど西の空には夕陽ありて雲間を漏る。遥かに続く丘陵の彼方は明るく、旅するか騎馬一騎。行くは満州なりや蒙古なりや。大陸は遥かに広く、満州も亦遥かに広し。

再びバスにのりて都市計画中の拡野を流星の如く走る。坦々たる幅員六〇米の三線道路は一直線にどこまでも続く。市街といっても広野の中を大道路が一直線に走り、所々に堂々たる高層建築物がぽつんぽつんと立っているに過ぎない。国都建設局の屋上に昇れば、やはり此の辺は堂々たる新市街で開け行く国都新京は一望眼下にあり。聚雨去りて輝く夕陽の下に、我が日本の勢力と共に、新京は未来をのせて、東西に南北に輝かしい進展を見せつつある。

東洋趣味豊かな忠霊塔は、満州随一の壮厳さを誇っていた。参詣人賑わう。霊前に謹しんで参拝する。

駅近くなる旭食堂にて夕食。十一時迄外出ありとの事、喜びの面を崩す。

八時過ぎ満州はまだ明るし。

午後十一時四十分（満州時間二十三時四十分）新京発、南へ南へ汽車は驀進をつづける。

満州の古き都——奉天

午前六時四十分。奉天駅前の大広場に出ると、赤煉瓦の堂々たるビルディングの並んだ放射状狀式街路が先ず目につく。洋車の群が客を求めて大童。又襲い来るニンニクの臭。朝食後黄バスに分乗して凹凸の支那人街の道を揺れつつ走る。全く満州に来たという感じがする。満州の臭（ニンニク）に嗅覚が痲痺してしまった頃同善堂門前で降される。同善堂については、周知の事実であるから略するが、その設備の行き届いているのには驚かされた。母の愛、人の愛も知らないで育ち行く孤児の身の上には全く同情させられた。此所に和歌山女子師範出身の保姆が居たのには驚かされると共に、其の偉大なる献身的愛の力には敬服させられた。

しばらく揺れて駐満熊谷部隊司令部を訪う。抗日教育の本家、東北大学の跡に司令部が置かれているのも皮肉ならずや。水彩画一枚を贈呈して部隊を慰問する。

北陵——清朝の太祖愛新覚羅を祀る。——は全く美しかった。お伽の国にでも来た様な華麗な建築物が鬱蒼たる松林をバックにおさまっているのは、又異った美しさが好い。

ラマ塔見学は中止されてバスは砂塵をまき上げつつ快スピードで城内へと走る。大山元帥奉天入城で名高い大南門より入城、城内は喧騒なる満人街である。

吉順絲房百貨店の屋上より城内を見渡した。外廓には高さ三丈、厚さ二丈と言う頑丈な城壁で、ところどころに城門が聳えている。有名なる白塔、旧宮殿が其の名にそむいて真黒く見える。百貨店より下りて馬車に乗れば、満人子供の総攻撃、「大人、大人」と呼んで金を呉れとうるさくつきまとってくる。御者が叱って頭を蹴ってもやってくる。誰れかが小さい子供にやると、大きい子供がもぎとった。まるで畜生の世界である。

忠霊塔参拝、「祖国の為に捧げたるいとも尊き人柱……」と奉唱すれば、荘厳な六角塔は今し夕陽に映えてひとしお輝いて見ゆ。これより自由行動、皆得意然と馬車にのって三々五々行くは何処。チョコレート屋の露西亜人の朗らかな顔、宝石商の小母さん。ユニオン百貨店のロシヤ美人。次から次へと若人の夢をのせて、馬車は市中をかけめぐる。

石炭の都「撫順」

旅行第七日六月一日　奉天の朝はすっかり朝もやに包まれている。奉天駅発七時半の汽車で一路撫順へと向った。限りなく続く広い平野だ。唯所々ポプラが茂り、鶏も一二羽遊んでいるのが見える。連日の強行見学に疲れた為か汽車の中で眠る者が多い。よい気持になってこくりこくりやっている中に、「ごとん」汽車は撫順駅にとまった。先ず石炭の燃える様な一種特有の臭が鼻をつく。

オイルシェール工場を特別の好意によって見せて戴いた。国策として燃料問題が論議される今日、皆んな関心を持つて熱心に見学した。電車にて大山坑に行き撫順炭坑の概略について説明をきき坑内の設備を見学した。今後毎年九百万トンずつ掘出してもなお六十年の生命を持つとのお話に驚き、更に満鉄収入一億五千万円の四十一%がこの炭坑の石炭運賃であるのを聞いては、ただ驚歎するのみ。

有名なる古城子露天掘の壮観に至っては、ただ芒然として眺めるのみであった。露天掘している区域の広さは東西五キロ南北三キロ、底はどこまであるのか一寸見当がつかない。ただ一面に霞と煙で霞んでいる。煙と言うのは、雨に依って自然発火して石炭が燃えている煙である。「撫順の万年火」として灯火管制の時以外は放任して燃えるに任せているとのお話に、自分の想像していた撫順と、現実に今見る撫順との余りにもひどい違いに皆ぽかんとしている。そこら中石炭だから常に那智黒の称ある連中の顔も白い様に見える。

見学が終って駅前に戻る。撫順は何と言っても東洋一の石炭の都だ。市街は整然として鉱業都市としてのあらゆる諸機関が設っている。終りに我々はここに在住する邦人二万人が中心になって、日夜営々として日本の燃料供給に働いてくれている事を銘記すべきである。

靖安隊と藤井少将

撫順より奉天に再び帰えって、直ちに靖安隊見学に向う。疲れ切って元気がない体を馬車にのせる。先生の馬車を先頭に二十数台の馬車が勇しく市街を走って行く。頭を揺られながら眠っている間に練兵場の前に着いた。靖安軍司令官藤井少将閣下が来た。和歌山練兵場と違って大陸の練兵場は正に大陸的だ。牛が悠々として草を喰んでいる。解らない満語の号令で兵士は一心不乱に訓練に従事している。兵の動作形式はなかなかうまいもんだ。日本の兵士と余り変らない。隊伍を組んで兵営を見学する。日本の兵営に変らぬ整然たるものだ。あの満人でも訓練されればこんなになるのかと感心させられた。将校集会所で藤井閣下のお話を聞く。

靖安隊は満州国中央直轄の近衛隊であって、満州国軍第一の精鋭部隊で幹部の大半は日系であって、その下に満人将校が満人の兵卒を訓練している。歩兵二連隊、砲兵一連帯、騎兵一大隊、機関砲兵一大隊の混成旅団である。徴兵募兵、半強制的で三年の任期を勤務する。計伐の際にも独立して非常なる大功をたてたそうである。この軍の特色は克く困苦欠乏に堪える点であって、一日の生活費十八銭（昨年までは十四銭）あればよいそうで、絶対に命令に服従する美点を持つが、兵の素質は落ちるそうである。

藤井少将は和歌山に長く居た人で、堂々たる体躯と熱と意気に燃え偉丈夫の持主であった。

帰途も馬車に乗って、満人の御者の愉快そうな動作を興味深く見守った。彼等はなかなか明朗楽天的で何の屈たくもなさそうに同じ仲間と話をしている。

暮れ行かんとする赤い夕陽に照らされた、御者の健康そうな横顔は長く強く印衆づけられた。

午後十時四十分奉天発。駅頭で満州服の人に「諸君ではさようなら元気で」と呼び掛けられた。にこにこしている美顔を見れば藤井少将であった。少将は便衣に変装せられてこれから奥地に行かれるのだそうだ。

（追記）八月二十六日、はからずも藤井閣下戦死の報に接し当時を回想して夢の如し。謹しんで御冥福を祈る。満州国軍の父と謳われた藤井閣下が自己の愛する満州国の為めに名誉の戦士を遂げられしは閣下にとりては本望であられただろう。堂々たる態度より受ける英雄的な感じ、その悠揚せまらざる古武士的風格が今更の如くなつかしく感ぜられる。

聖地旅順の感激

六月二日。一同は相当疲れたが元気は益々旺盛。車中に目覚むれば北満の大平原と異った地形が展開している。山あり谷あり丘陵あり、楊柳が車窓に近く並び、豚が悠々と遊ぶ。満州でグロテスクなものの第一は黒い豚だろう。こいつが華々しくも犬と連れだって線路の傍へ遊びに来ていた。汽車が気笛を鳴らす。豚はすぐ黒い尻を見せて少々走った。犬はあつかましく二声三声吠えた。果して汽車に対して若干歩避難した豚と御丁寧に吠えた犬とどちらが賢明だろうか？。汽車は白い鼻息を吐いて過去った。

×　　×　　×

旅順駅より二頭だての馬車で白玉山にのぼる。馬車に乗って登ったのではなく馬車から下りて御親切に馬車の後を押し上げて登ったのである。白亜の表忠塔は碧空をバックに輝いている。其所より旅順港を俯瞰すれば、港内は一目だ。小さい港口も、遥かに旅順をとりまく諸砲塁も皆一望の中におさむ。

日露戦争従軍の案内者の熱に燃える説明は、力強く我等の耳朶に響く。一回、二回、三回、決死の勇士の美しい犠牲に成功せる港口閉塞隊の勇しい活躍——日本人たる者誰が感激せざる者あらん。

東鶏冠山北堡塁に行く。毎年旅行に行った先輩に聞かされるが様に実に強大なる永久築城の様子が偲ばれる。コンクリートと硬い岩石で造られた地下の兵営の物すごさ。砲塁に残る無数の弾痕。我が兵の血潮によって色が変わったと言われる赤い岩石を見た時、我が皇軍将士の悪戦苦闘が痛ましくも目前に浮ぶ。一足進むに血、一寸進むに肉、ああ尊きこの土の香、熱弁は結ぶ。「皆さんは此の皇軍の犠牲的精神を高潮せよ。」と。

馬車は長駆。黄塵万丈の中を水師営に行く。粗末な民屋に弾丸あとの著しい棗の木に、乃木・ステッセル両将軍の歴史的会見を想起す。爾の（なんじ）霊の山——二〇三高地。突撃する旅の子は、突撃々々の皇軍の感激を味い、護国の鬼と化した忠勇の皇強者に心からなる礼を捧げる。馬車は快走又快走、山あいの道をとばす。感激と興奮のあまり、振り返って見る砲台に、輝かしい斜陽が映えていた。汽車で大連へ。六月一日開かれたばかりの大連駅——近代美の象徴、大大連のシンボルだ。東洋一の貿易港「大連」の町はどことなく急しい。

「疲労のため、本日は外出なしにする。終り。」

大連の印象

大連はアカシヤの街だ。街路の並木、白い花の群りに風さえ香る。近代的文化都市の匂いが高い。

都会の朝は新鮮な果実の香り、軽いマーチ風の旋律に六月三日の行動が始まる。先ず満州資源館で満州の認識を新にし、朝の日本橋を渡りて大連埠頭に行く。雑沓。荷役。巨大な待合所。巨船が桟橋に横づけになっている。——満州国の門戸大連は既に力強い働きを見せている。埠頭ビルディング屋上より大連の大観を俯瞰し、頭をめぐらして大連市街を一望の内におさむ。「美しい街だ。」「日本の街だ。」我等の感歎の声はしばし止まない。それより油房見学——「工場内で撮影を一切御断りします。」といういかめしい注意にまず驚く。むせる様な熱さと臭の中で満人が裸で働いている。なるほどこれでさっきの注意が解った。満州の特殊工業として吾等の眼をひいた。

電車で大連西崗子公学堂を見学し露天市場へ行く。一名泥棒市場といわれる。近代都会の二重人格面、それは余りにも醜悪な現実だ。何でもある。食堂といわんか、其の前には真赤な蛸がぶらさがっている。むつとする小路を駆ける様にして阿片窟に行く。画前の燕子窩、（阿片窟）はまだ淋しく一人の男が阿片を吸っている。区ぎられたもう一つの部屋では天上の夢を見ているのであろう。口をあけてぽかんと眠っていた。

此処は下層民の日常生活必需品のマーケットであるのみならず、彼等にとって又となき民衆的娯楽地である。

梨園（劇場）、電影場（映画館）、書館（妓楼）、寄席、見世物小屋等がひたひたと並び、特有の匂い、雑踏、高声。——満州情緒を味い、満州社会相の縮図を鮮やかに見る事が出来た。

星ヶ浦の美しい眺めを前にして昼食を済し、ここで解散、午後は自由に市街見物をした。午後十時、多数の県人先輩の見送を受け再び南満平原を北へ北へと驀進する。

旅行第十日のこと

早くから目をさまして旅装を整え、左手に橘大隊長で有名な首山堡（橘山）山上の記念碑を拝しつつ過ぎし日の悲壮なる戦を想像しつ遼陽駅へすべり込む。駐屯せる将校の人達多数のお迎えを受けて我等感慨無量——有志将兵慰問のため馬車を兵営へと走らす。我々は有名なる遼陽白塔付近の自由見学を行い、倉石部隊長よりお話を聞く。「本日は御苦労。一同感謝している。」と冒頭されて、「南満は先輩の血を流した処、北満は我々の血によって開発するぞ。北満の黒い土の沃野が我等等を待っている。」と北満への希望、抱負を語られた。優しい笑顔の中にも、眼鏡の奥底に光る眼光は鋭い。まさに武人の典型との印象を感じた。

蘇家屯より安奉線に乗り鳳凰城付近にて娘々祭を見る。曠野の中にぽつんと娘々祭を中心に真黒い人出だ。

トンネルが非常に多く、明るくなっては暗くなる。暗くなっては明るくなる。千山の峨々たる岩山を珍しく見る。車内は乗客が少しで久し振りにゆっくりと車席に寝ころぶ事が出来た。トランプに興じて時間のたつのを忘れている間に、汽車はホームシックに満されつつある我々を乗せて、国境の町安東に向っている様だ。しかし安東の町はまだ遠い。

午後五時三十五分頃、やっと安東駅についた。直に安東公園に行く。黒い満州服は何時の間にか白い朝鮮服に変っていた。街も静だ。

夕食後国境の街安東の雰囲気を味うべく散歩に出る。物価は相当に高い。いよいよ日本へ近くなってきた。むし暑い一夜に故国への夢のフクスミホテルの枕に結ぶ。

詩の都平壌

六月五日、相手は名にし負う安東税関だ。トランプをいくつまで許してくれるかが問題であったが、税関検査は果然厳重でトランプは一つより許してくれなかった。見る見るトランプは山の如くつまれてゆく。惜しそうに怨めしそうに眺める旅の子、憂鬱なる旅のスナップ。鴨緑江国境上の人橋は賑かだ。どぅーという間に朝鮮新義州に入って十日間のニンニクの臭から解放される。

北鮮風景――今は田植えの最中だ。泥田に下り白衣を着て田植する半島の美しき矛盾。それは微笑ましい半島の芸術だ。

平壌着。平壌神社に参拝して後、林間の坂道を歩み七星門――北斗七星即ち北門を意味する、――を過ぎて乙密台に行く。此処から付近を展望すると流石に景色が良い。前方には牡丹が相対し大同の流れは清い。

玄武門――自分の想像していた程大きい門ではなかった。原田重吉の武勇談もこんな門では感じがのらない、所々にただぼんやりと半島人が座りこんでいるのが見える。高い台の上に白い長衣を着て、どこともなくぼんやり眺めている夢幻的な様子が、朝鮮式の楼屋とよく調和して古代楽浪文化の匂いが暗示される様な気がした。

いよいよ二艘の舟に乗って大同江を下る。豊かな水流に竿さして沿岸の絶景を勝しつつ下れば、妓生の鳴らす音楽と歌声に浮かれ踊る舟が間近に見える。ふと眼を岩壁に転ずれば大きな文字、小さな文字とりどりに刻まれたのが珍らしい。この風光を賞して作った詩文だそうだ、十一時迄市中自由見学。初夏の平壌の夜を散歩す。詩の都を後に一路京城へ。

半島の都「京城」

六月六日　又も汽車のベットに夜は明けて、京城駅頭多数先輩の出迎に感激を覚ゆ。三重旅館に疲れを休める間もなく直に市中見学に迎う。古色ある門や楼閣の立つ処古都らしい景色である。南大門を通りて朝鮮神宮に参拝、ここからの京城府展望はすばらしい。総督府は内地にも見られない堂々たる偉容を誇っている。

「内地で之程の建築をするのに何万という大金を出してもむつかしいですね。」と説明者が得意になる。玄関の内部などは一寸博物館か美術館の様である。何から何まで朝鮮産の石材で作られたこの建物、実際朝鮮ならでは出来ぬ建築である。四大節等に儀式を行う中央ホールには和田三造画伯の麗筆になる大壁画がかかげられてあった。

総督府の裏手には景福宮がある。慶会楼・勤政殿・修政殿等を見て歩く。殊に勤政殿は、結構壮大、京城最大の木造建築物で、我が国寺院の建築様式、或は又平城平安時代の宮殿様式との関連を示唆するものである。勤政殿の石階石欄には蔦が搦みその前庭の石畳には中央歩道の左右に文武両斑の席次を示した正一品より従九品までの石標が立った侭になっている。多大の年月を費して始めて出来た自然と人工との諧調によって醸し出された美観こそは、遊子をして低徊去る能わざらしむるものである。電車で昌慶苑へ行く。今日は日曜で大変な人出だ。ここは開放されて一大公園となっていて、京城のオアシスである。李王家で現に御使用になっている秘苑の参観を許して戴く。六万一千坪に余る自然の地形を利用したもので、山あり谷あり水あり、そのかみの姿を思い感慨無量なり。松林の中に亭々と聳えた大樹の頂には鳥の巣があり、鸛か鶴かとまがう大鳥が青空にゆったりと飛ぶのが見えた。

博物館の出土品其他の陳列物を見ていると上代の日鮮文化の緊密なる交渉の跡がまざまざと感得される。

明けて六月七日、京城府徳寿普通公学校を参観す。明治四十五年創立されたそうで、国語の授業を参観したが、その教授法と発音の正確さは相当なもので我等の教えられる点が多かった。教科目は内地と殆んど同一で朝鮮語が週に二時間あるのが異っていて、国民道徳、国体観念の養成、職業指導に重点を置いて指導しているとの事であった。学校の先生の御世話によって中流の鮮人家屋を見せて戴く。鮮人の家庭及道徳生活は孝を本とし、一般に年長者を敬う風と敬虔の資質があり寛容優雅な風俗習慎は我が平安時代の面影を連想させるものがある。午前十時四十五分一路釜山に向う。

南鮮から——故國へ

車窓から見る朝鮮の土の色は白か黄か然からざれば赤である。茅屋が瓠包のような恰好で丘の麓から頂上にかけて並んでいる景色はなかなか面白い。朝の薄靄がかかった大気の中に草屋根と土の色とが柔かく融け合っている。冠を頂いて悠々と野良を逍遙する鮮人を見かけた。畑にいる人々は大半手を休めて汽車を見送っている。屋根の低いながらもあの一種の反り工合から何となく平安時代の建築を思わせる。

午後十時釜山着、連絡船興安丸に乗る。十一時半冷雨けぶる夜の港に銅羅が鳴る。歓喜と離愁の交錯する港の感情。明日は内地だ。玄海灘も夢の中に渡る。

最後の日六月八日——船は下関に着く。小雨そぼふる中に上陸してデパートに朝食だ。駅弁にあいてみた僕達には久方ぶりに大変うまかった。

雨の山陽線沿線の風景も又格別だった。我等は日本に内地に帰えったのだ。厳島の鳥居を雨の中にかすかに見る。鯉城、烏城も見た。白鷺城は雨に煙ぶりて見えなかった。雨の須磨明石の絶景を眺めつつ神戸から汽車は物凄く飛ばす。阪和も速い。我等の類にも元気が出て来た。

「東和歌山」「東和歌山」満鮮の旅一巻はジ・エンドのタイトルに幕が下りた。

追想

満鮮の旅、それは我等の憧憬であり、夢であった。今我等が現実に眺めし満鮮のプロフィルは、赤い夕陽の感傷でもなければ、妓生さんの夢の如き姿でもなかった。新興躍進の機運に漲る若き力強い満鮮の息吹であった。

美しい景色、美しい風俗人情、それは我等に美しい詩を、快よき音を与えて呉れた。日本人なるが故に味ふ感激静かに想起せよ。忠霊塔・南嶺・旅順・平壌。日本を離れて日本を知る喜び。旅に出てはじめてしみじみと人生を想う。

ここに満鮮旅行の意義がある。

（後記）本紀行文は上述の諸君の「満鮮旅行紀行文」の中より抜粋して編集したのであって、文責は全部編者にある事を御断りします。

旅行日程

日次	月日	駅　名	時	宿　　泊	視　察　個　所
1	5月26日	東和歌山 発 米　　原 発 敦　　賀 着 　　発	4:28 9:47 11:01 14:00	汽船 (さいべりや丸)	琵琶湖
2	27日	航　海		汽船	
3	28日	羅　　津 着 　　発 図　　們 発	14:00 15:15 19:40	汽車	清津港、図們江、鮮満国境
4	29日	ハルピン 着	15:17	名古屋ホテル	孔子廟、志士碑、忠霊塔、松花江、ロシア人小学校
5	30日	ハルピン 発 新　　京 着 　　発	10:45 16:20 23:40	汽車	皇宮、南嶺、忠霊塔、関東軍司令部大使館
6	31日	奉　　天 着	7:05	一力ホテル	忠霊塔、同善堂、北陵
7	6月1日	奉　　天 発 撫　　順 着 　　発 奉　　天 着 　　発	7:20 8:50 13:00 14:06 20:40	汽車	古城子、露天掘、オイルシェル工場、大山坑、靖安隊
8	2日	旅　　順 着 　　発 大　　連 着	10:15 17:35 19:17	磐城ホテル	白玉山、東鶏冠山、北保塁、水師営、爾霊山
9	3日	大　　連 発	22:00	汽車	資源館、築港、星浦、露天市場、油房、公学校
10	4日	遼　　陽 発 蘇 家 屯 着 　　発 安　　東 着	7:49 8:50 10:31 17:35	富久寿美ホテル	駐屯軍慰問、満鮮国境、鴨緑江
11	5日	安　　東 発 平　　壌 着 　　発	9:20 15:06 23:05	汽車	七星紋、玄武門、永平寺、乙密台、牡丹台
12	6日	京　　城 着	7:25	三重旅館	朝鮮神宮、南大門、秘宛、総督府、景福宮
13	7日	京　　城 発 釜　　山 着 　　発	10:45 22:00 23:30	汽船 (興安丸)	普通学校、沿線
14	8日	下　　関 着 　　発 東和歌山 着	7:15 9:15 21:30		山陽沿線

このテキストについて

・このテキストは、『和歌山県師範学校校友会会誌 第 31 号』（昭和 13 年 3 月発行）の p.127-141「満鮮旅行記」を翻刻したものです。
・読みやすさを優先するため、表記は、現代かなづかいを用い、旧字体の漢字で書かれているものについては現在使用されている漢字に置き換えています。ただし、送り仮名はそのままにしています。
・明らかな誤植とわかるものは修正しています。
・原文には政治的な公正さを欠く部分、少数者に対する配慮が考慮されていない部分などがございますが、当時の時代背景を斟酌くださいますようお願いいたします。
・写真は省略しています。
・旅行日程の部分は、原文では冒頭に掲載されていましたが巻末に移動させました。また、当時の時刻表等と照らし合わせながら、時刻の部分に補整を加えています。
・このテキストの詳細・引用については、**和歌山大学教育学部 紀学同窓会** までお問い合わせください。

以上